

資料紹介

ここでは、経済学部資料室収蔵の資料や、公開データベースなど、広く当室所蔵資料に関して紹介・解説する。

門多道別洋行日誌

本資料は、台湾総督府中央研究所工業部電気化学科長であった門多道別氏（1883 - 1945）が、昭和 6（1931）年 7 月より翌年 3 月まで、研修のため世界一周をした際の記録ノートの複製である。残念ながら、原本は道別氏の死後に失われてしまったが、近年、道別氏の孫にあたる門多治氏（昭和 51 年度本学部卒業）がノートを電子複製した複製版を発見し、2013 年 5 月 19 日に経済学部資料室に寄贈いただいた。

複製版は、ノートを見開きでコピーしたものを山折りにし、ファイリングして 2 分冊したものである。ファイルの背と表紙には「道別氏洋行日誌 1」「道別氏洋行日誌 2」とそれぞれ記載されている。

門多道別氏（旧姓：毛山）は、明治 16（1883）年 4 月 19 日、京都に生まれた。京都府立第一中学校、第三高等学校、京都帝国大学という当時の関西におけるエリートコースを進み、京都帝大理工科大学で製造化学を専攻した。大学時代の指導教授は、当時、苛性ソーダと塩素の製造装置に関する研究の第一人者の吉川亀次郎博士であった。

門多氏は、明治 42（1909）年 7 月に京都帝大を卒業すると、陸軍一年志願兵として松山歩兵第 22 連隊に入営し、翌年 11 月には陸軍歩兵伍長となった。明治 44（1911）年 1 月には、その経歴を買われて、関東都督府の食塩電解試験に関与して曹達研究所囑託となり、旅順工科学堂（後の旅順工科大学）電気科で教務職に就く。

当時、関東都督府の白仁武民政長官は、関東州の塩田に注目し、関東州塩の販路拡大と、国家産業振興のために、原料に塩を多量に使用する苛性ソーダの製造を思い立ち、吉川門下の門多氏を招聘して、ソーダ及びびさらし粉の製造装置の研究を行わせた¹⁾。塩素と水素の混合ガスが発生して大爆発を起こすなど、研究は困難を極めたが、大正 2（1913）年 9 月には、苛性ソーダの工業的連続製造法を確立するに至った²⁾。その後、白仁長官の尽力によって、大正 4（1915）年に大阪曹達が設立されると、この業績が評価され、門多氏は初代技師長として招かれる。さらに、大正 9（1920）年には、台湾総督府研究所技師に移り、同 14（1925）年には、同工業部電気化学科長に就任した。

洋行はこのポストに就いてから 6 年後のことで、世界恐慌への対応としての金解禁により、正貨の国外流出が続き、それに伴って引き起こされた昭和恐慌のまっただ中であった。さらに中国大陸に目を転ずると、関東軍により満洲事変が引き起こされた年でもあり、門多氏も 9 月 18 日の日誌末尾に「日支事件突発、日軍奉天占領ノ日」と書き記している。

このように政治、軍事、経済のいずれの点においても激動の時代に、当時 48 歳の門多氏がどのような理由で、世界一周の研修を台湾総督府から許されたのかは定かではない。上述のように、技術的に大きな足跡を残した人物とはいえ、この研修が単なる褒賞とは考えがたく、今となっては詳細を明らかにし得ないが、広い意味での情報収集など何らかのミッションを帯びていたと推察される。

残された日誌は、毎日が、行程や天気・気温などの事実の記録に属する部分と、五感で体得したことへの感想などの感覚的な部分からなっており、門多氏が興味をもった部分では、フリーハンドで絵や図も描かれている。渡航先では

多数の日本人との交流もあり、三井物産の支店で信用状を発行してもらったり、各地の横浜正金銀行支店にも立ち寄ったりしている。日誌は、全体としてプライベートな雰囲気を醸し出しつつも、台湾総督府職員としての公的な活動の片鱗を一部にのぞかせている。

門多氏は台湾を出発した後、日本→朝鮮半島→満洲→ロシア→ポーランド→ドイツ→スウェーデン→ノルウェー→ドイツ→チェコ→ハンガリー→オーストリア→ドイツ→フランス→イギリス→オランダ→フランス→スイス→イタリア→ギリシア→トルコ→パレスチナ→エジプト→フランス→スペイン→ポルトガル→フランス→イギリス→アメリカとたどって、日本に戻る経路をとっている。当時、日本からパリへのルートは、中東を経由する船便と、シベリア経由の鉄道があったが、1930年頃より、時間と費用の観点から鉄道経由が主流となったとされている³⁾。門多氏も、当時主流のシベリア鉄道で欧州入りしている。なお、門多氏はパリには3回立ち寄っているが、3回目の滞在では、当時、日本人の間で有名であった邦人経営の旅館「ぼたん屋」に宿泊し、その紹介カードを日誌に貼付している。

日誌の中で興味をひかれるのは、当時の各国での換金レートや、移動時間、運賃、日々の食費や雑費がこまめに記されている点である。1931年当時の欧州各国の購買力をうかがう上で、興味深いデータを提供してくれるばかりか、各国の情景、さらには訪れた街や人の雰囲気に關しての描写からは、恐慌後の世界の様子がよく伝わってくる。

この時代に欧州に滞在した芸術家や研究者の記録は存外知られているが、恐慌前の1920年代か、戦時体制に突き進む直前の昭和10(1935)年以降のものが多く⁴⁾、技術者の記録や恐慌の最中の記録はあまり世に出ていないと思われる。

今後、当該時代の歴史資料として、また、これまで知られている欧州滞在記録との比較資料として、様々な観点からこの日誌が活用されることを望みたい。

なお、本資料は現在、デジタル公開の準備を進めており、近日中に東京大学経済学図書館のデジタルコンテンツの一つとして公開される予定である。

【註】

- 1) 大阪曹達70周年記念社史編集会編『大曹70年のあゆみ』1986.5, p.132.
- 2) 前掲註1) 『大曹70年のあゆみ』, p.134.
- 3) 和田博文「日本人のパリ体験：「黄金の二〇年代」から世界恐慌へ」『総合研究所所報』（奈良大学）10, 2002, p.70-80.
- 4) 芸術家の旅行記録については前掲註3) 和田論文を参照のこと。研究者の記録については、統計学者の有澤廣巳（『学問と思想と人間と：有澤廣巳の昭和史』東京大学出版会, 1989.3）や、東洋史学者の宮崎市定（『菩薩蛮記』『宮崎市定全集』20, 岩波書店, 1992.12）などがある。有澤のものは1920年代のドイツ留学中の、宮崎のものは昭和11（1936）年以降のパリ留学中の西アジア遊学の記録である。

（講師 こじまひろゆき
小島浩之）